



讀方秘傳抄

特別
イ 4
3163
91



貴
14
3163
91



和歌讀方秘傳抄

壺川院初度百首之内

年紀可尋之
号を師百首



あゝいかに

隆大納言為宗公實

清のこれ釣目かくれのうら書る去年のかくことなぬことり
なけのありくる日の新をうらりてなふしと隠れたる物と釣目
よきにうせは草をよとくかくれ釣のこぬま西のらにまを釣目
かくれといひり夕日くは是はむらりしよまてやこり
こそ月め命

神いれて

神いれておねまぬまぬおねおねとけの垣ぬまり
の成りておねまぬまぬおねおねとけの垣ぬまり

あつし...
あつし...
あつし...

あつし...

あつし...
あつし...
あつし...

あつし...

あつし...
あつし...
あつし...

あつし...
あつし...
あつし...

あつし...

あつし...
あつし...
あつし...

あつし...

あつし...
あつし...
あつし...

ねとくし

ねとくし秋の風はらむにふきあふくを凍りしもの
ふくしはせきねるやなれは切方とすこし研破を
て用由ふに但やねねとけねる用ぬき信しるは
おきりて数方とすくす前夜味もやしとやふす
是たのねね備し

廉のま

河のま廉のまうへりてりてりてりてりてりてりてり
けり名款とはふらうてりてりてりてりてりてりてり
集に秋をまうへりてりてりてりてりてりてりてり
と云ふは中まうへりてりてりてりてりてりてりてり
てりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
がりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
またりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
ふりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

久津しむ

駒とふりてりてりてりてりてりてりてりてり

何れと云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
顔なとすもやへりてりてりてりてりてりてり
何れと云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
くろしとすもやへりてりてりてりてりてりてり
何れと云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
と云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
何れと云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
は古よりと盗りてりてりてりてりてりてり

草はあふ

かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
と云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
何れと云ふもやへりてりてりてりてりてり

付雨ふ系

かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
かきりてりてりてりてりてりてりてりてり
と云ふもやへりてりてりてりてりてりてり
何れと云ふもやへりてりてりてりてりてり

勢ぞあつゝいづれもあはれぬものなり

しらべのうた

しらべのうたはしらべのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
しらべのうたはしらべのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

水くみ

水くみのうたは水くみのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
水くみのうたは水くみのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

かき

かきのうたはかきのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
かきのうたはかきのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

紫車

紫車のうたは紫車のうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
紫車のうたは紫車のうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

紫車のうたは紫車のうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
紫車のうたは紫車のうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

むす

むすのうたはむすのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
むすのうたはむすのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

吹りけ

吹りけのうたは吹りけのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ
吹りけのうたは吹りけのうたにたゞしきものなり人あつゝはたせ

かきやいふことあるはしるしに

ゆきよけ

ふらふらあはれゆく雪よけのうきをきくゆきをまらうのうきよ
けしゆくのをきくは雪をきくゆきをまらうのうきよ
ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ

ゆきよけ

戦前守友京仲実

ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
ゆきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ

玉ころね

玉ころねの初まにばかりのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
玉ころねの初まにばかりのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
玉ころねの初まにばかりのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
玉ころねの初まにばかりのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ

いくたて

いくたてのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
いくたてのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
いくたてのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
いくたてのうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ

飛火の京

飛火の京のうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
飛火の京のうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
飛火の京のうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ
飛火の京のうきよけのうきよけのうきよけのうきよけのうきよ

唐火乃くあるは若くは中つたあからかき松崎の
神はは市の上ありて天のまへに力雄その
のたむけはりてあらたしあはれい

唐のついでにのまへに

唐のついでにのまへにのまへに成持りし
一説矣形尾唐持唐の矢若のまへにのまへに
一説屋刑尾唐のついでにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに

唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに

唐のついでにのまへに

唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに

唐のついでにのまへにのまへにのまへに

小車乃錦の紐

又小車乃錦の紐のまへにのまへに
車乃錦の紐のまへにのまへにのまへに
車乃錦の紐のまへにのまへにのまへに

唐のついでにのまへに

唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに

唐のついでにのまへに

唐のついでにのまへにのまへにのまへに
唐のついでにのまへにのまへにのまへに

心

三十一

とくは唯しほをなほとくめしと物にがはるるは海に
この取ありしは心の海に唯もあらずとて我にありて後世に
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる
ぬありしは心の海に唯もあらずとて我にありて後世に
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる

たつしほ

心
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる
ぬありしは心の海に唯もあらずとて我にありて後世に
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる

くーをなほとて死するは物にまはるる

海のやうに

とくは唯しほをなほとくめしと物にがはるるは海に
この取ありしは心の海に唯もあらずとて我にありて後世に
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる

むかし

むかしは海に唯もあらずとて我にありて後世に
そとに信じて唯今心持しとて死するは物にまはるる
とて世の中をこのよとてなほとくめしとて死するは
唯もあらずとて死するは物にまはるる

正持のまゝの田中へ寄ればいふはあれ我もひびくはうらや
いふはあれいづれの昔もあつたはうらや

うらやのうらや

かろやいふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

うらや

いづれかをいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

あはれ

茶石のうらや

教位友系那仲

あはれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

あはれ

あはれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

あはれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

あはれ

あはれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

金の鈴

我そのいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

是れは漢朝の集りては橋のうらや
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

あはれ

あはれいふはあれいふはあれいふはあれ
いふはあれいふはあれいふはあれいふはあれ

そらねのうみとけさのついでに
よのこらさるゝやうに
くさくさのついでに

天は名を

空のうみとけさのついでに
よのこらさるゝやうに
くさくさのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

みこ

みこはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あま

あまはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

きこ

きこはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あま

あまはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あま

あまはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あま

あまはあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

是に言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

くろく

いふに言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

まろく

いふに言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

にせり

いふに言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

散位高尔基俊

いふに言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

卯

いふに言ふ中將奥列下りありてありては新成とありて言ふ人
々ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
物ありては奥列のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ
一舟のしりあはれみりたりありてありては奥列のしりあはれ

音り

音りよき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

音りよき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

龍田よき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

好道

一宮純信

身よき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

あいの音は草

前井院河内

あいの音は草つみよき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

しこたし

あいの音は草つみよき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

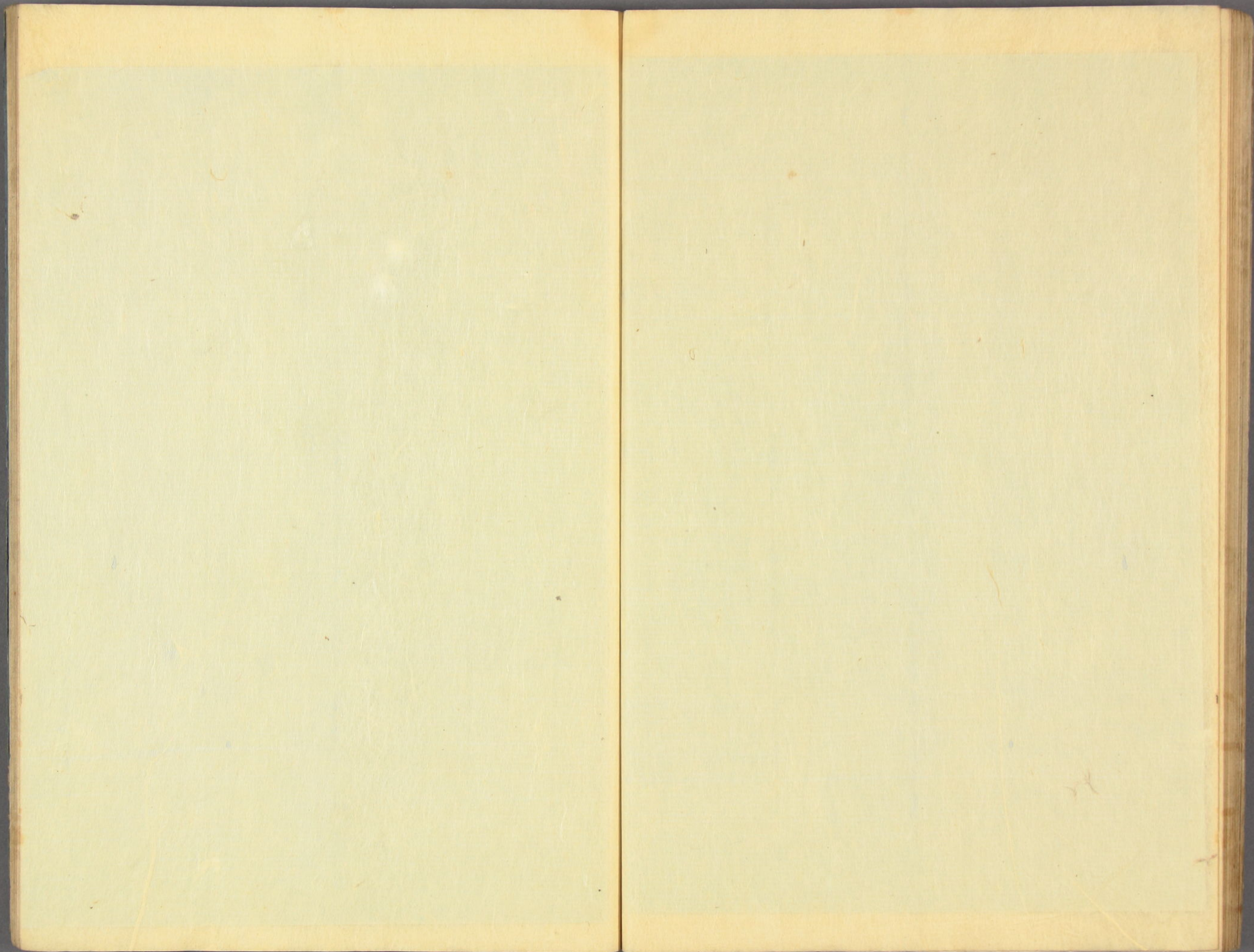
流

あいの音は草つみよき音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

は一巻に於て、音の響けありてく、流の音にまよふ人ぬきり

天正十七仲秋天

玄旨法下在判



和歌謠り秘傳抄

堀川院御百首之目

永久四年十二月五日
牛嶋院御百首

出峯のこし

從三位行在京右大臣源朝臣歌仲

あさけや燈舟なるころそよみのよのむらさかづね旅のさき

あさけのこしはそよみのせしむらさかづねのなまのよのさきなひたり

しこし

あさけのこしはそよみのせしむらさかづねのなまのよのさきなひたり

あさけのこしはそよみのせしむらさかづねのなまのよのさきなひたり

そらちのこし

あさけのこしはそよみのせしむらさかづねのなまのよのさきなひたり

あさけのこし

あさけのこしはそよみのせしむらさかづねのなまのよのさきなひたり

草のまきし〜が〜
と下利〜
の香あ〜
射し〜

し〜し〜

あ〜
世方の色〜
物成〜

音あり〜

多〜
音あり〜
津向〜
ふ〜
そ〜

ふ〜

〜

あ〜

〜

あ〜

〜

あ〜

〜

あ〜

〜

かゝるの物成してはるるをくくすなりは別入の物成してはるる

てんてんてん

はるるをくくすなりは別入の物成してはるる

はるるをくくすなりは別入の物成してはるる

夕暮る

夕暮るはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

夕暮るはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののき

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

田舎のな

田舎のなはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

田舎のなはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののき

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののき

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののき

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののき

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

あまののきはちぬあしゆをくくすなりは別入の物成してはるる

...
 ...
 ...
 ...
 ...

かみねきりに歩道とよめるる

かしこも成程のまじりゆふのたまたまは物まらぬ
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...

音行

...
 ...
 ...
 ...

たらのみこ

...
 ...
 ...
 ...

日のこ

...
 ...
 ...
 ...

散後從其下原躬臣忠房

~~~~~

いかり坂

いかり坂さういふと何と云ふか  
字も後行をいかりといふは西之松の  
いかりといふは人のまわり  
いかりといふは初ま部  
いかり根元をいかりといふは  
いかりといふは二月  
いかりといふは

まじりか

あけりおぬいふらあやま  
まじりか

いかり

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

いかり

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

いかりといふは西之松の  
いかりといふは

あせの入

あせの入

あせの入

あせの入

あせの入

あせの入

あせの入

あせの入

ふもをいんりのありのあしあはなすしものまふた橋を  
にあらふあしあはなすしものまふた橋を

竹のよさ

いとあはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いらさく

あはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いらさく

くらさく

くらさくあはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いらさく

くらさくあはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いらさく

夕は

夕はあはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いらさく

あはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を

清の寺

宗と出て清の寺のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を

宗と出て清の寺のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を

三度てふ寺

三度てふ寺のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を  
いれ下りてあはれしものまふた橋を

いれ下りてあはれしものまふた橋を

いれ下りてあはれしものまふた橋を

庭橋

あはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を

あはれ竹のよさをいれ下りてあはれしものまふた橋を





育おの世

くわの世をくらふあはらけは清の音とあはれいづまへてあはれを  
あはれに現をのこさるるあはれいづまへてあはれを

三編よやーりなまへ

つねつゝまなへてあはれいづまへてあはれを  
神鏡云と婦と社を一集と書とつづまへてあはれを

ふかたあ

ふかたあふかたあふかたあふかたあ  
ふかたあふかたあふかたあふかたあ  
ふかたあふかたあふかたあふかたあ

いとしく

いとしくいとしくいとしくいとしくい  
いとしくいとしくいとしくいとしくい  
いとしくいとしくいとしくいとしくい

夜通娘

夜通娘夜通娘夜通娘夜通娘  
夜通娘夜通娘夜通娘夜通娘  
夜通娘夜通娘夜通娘夜通娘

しんり

しんりしんりしんりしんりしんり  
しんりしんりしんりしんりしんり  
しんりしんりしんりしんりしんり

こまの音

こまの音こまの音こまの音こまの音  
こまの音こまの音こまの音こまの音  
こまの音こまの音こまの音こまの音

こしらあ

こしらあこしらあこしらあこしらあ  
こしらあこしらあこしらあこしらあ  
こしらあこしらあこしらあこしらあ

後とおりの山

後とおりの山後とおりの山後とおりの山  
後とおりの山後とおりの山後とおりの山  
後とおりの山後とおりの山後とおりの山

平河く

肥後守定成女本名肥後常陸

あぶるものかの雅もつまふむ知らくともあうくらき  
行基の御名よ山をけりあうくもあうけく父をうぶ  
冊しよあふさきあうき

志のの里

けりきき志のの里はけりけりきき夏はゆゆゆゆ  
志のの里いつしよまきあう新うきしは本名ありて  
なまよきあう

席のむ

方科はきけをらてあうけりあうあうあうあう  
むしひ祥のむしひ

志の山

志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう

平河く後

あー東の山はあうあうあうあうあうあうあうあう

御名よあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう

歌よりの

同定成女六條院也房大進

あつらうあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう

人しうあ

志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志の山あうあうあうあうあうあうあうあうあう

志のの里

志のの里あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志のの里あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
志のの里あうあうあうあうあうあうあうあうあう

物あうあ

物あうああうあうあうあうあうあうあうあうあう

おの字ろくしておそあしと斗あし  
おそあしと斗あしと斗あし  
おそあしと斗あしと斗あし

髪の中をうらうらと

髪の中をうらうらと  
髪の中をうらうらと  
髪の中をうらうらと

つふふふの夜

つふふふの夜  
つふふふの夜  
つふふふの夜

右一巻抄座右お披露見也敢不可出言介耳矣

天正十九秊癸亥念八日

法印玄旨其判

莫傳抄

加賀法草

正月一日大内餅の上よ玉大根也

ゆき草の中あそびもたれかこころやうそるうにそまいつらふ

初八草

松ケり

年こころみしうれやとこころもあかしくぬきもあまにあらう

子代八草

松乃あそび

神山あそびにあつた代もあましくあそびしと伊州にのまれ

子代八草

正月七草のあそびつらそまあそ

いづこもあそびしこころあましくあそびしと伊州にのまれ

根白草

せり

潮よなるうれやとこころもあましくあそびしと伊州にのまれ

梅散八草

梅乃あそび

山里にあそびしと伊州にのまれ

尋深程

梅乃好いあり

きりぎりしやうのせいのしるしは花のしるしは花のしるし  
夢見草 へい

化名草

同

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

高草

はなはな

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

女毛草

松のしるし

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

他草

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

一夜草

はなはな

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

二夜草

はなはな

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

一葉草

全

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

二葉草

全

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

三葉草

花のしるし

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

四葉草

全

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

五葉草

柳

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

六葉草

全

あふくくしやうのしるしは花のしるしは花のしるし

花見草

しんがいし

雲いりや比まきりせし山つきの朝の雲をさうとむみさ

火取草

はし

花さけき秋のそよ風いとしりさるるまゆみらねをさう

二季草

序

いつこを古郷とて二季より年よこいといふ

二季草

夜

夜まては花や清く二季は花のそよ風かからるる

松入草

あら

花のしらやとおまきもまきとくねさうりねんくふい

酒古草

三月三日酒入て飲枕をり

のむくやもまをぬみみこまかふまのこらさうせ

法士思草

る草花の代と種は月やむね花をさう

目新草

天女の苗代といり

手紙まね秋やまう天の川いつけの草をさう

折生草

まき草のけあま又い春まね花をさう

まき草のけあま又い春まね花をさう

まき草

まき草のけあま又い春まね花をさう

花のそよ風のあうらあま枝のまのほろんて

花根草

し

いそ花のあうらあま枝のまのほろんて

夏部

初見草

卯む

まき草のけあま又い春まね花をさう

雪入草

あけ

おとそを我神ぬり雪入草のあけ

垣見草

全

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

刑見草 ああ

唐の王は草花を好む。唐集に人々中あはれ  
あはれいと山花ありて。唐集の御書に  
皇朝の御書ありて。唐集の御書に  
唐集の御書ありて。唐集の御書に

かたむさ

唐集の御書に人々中あはれ  
あはれいと山花ありて。唐集の御書に  
皇朝の御書ありて。唐集の御書に  
唐集の御書ありて。唐集の御書に

まてんねしなむ世の人のかたむさな花のうらふいしのや

白き草 花

唐集の御書に人々中あはれ  
あはれいと山花ありて。唐集の御書に  
皇朝の御書ありて。唐集の御書に  
唐集の御書ありて。唐集の御書に

石竹

かたむさ

唐集の御書に

かたむさな花のうらふいしのや

唐集の御書に

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

唐集草 橋

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

秋の草 夏田

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

池見草

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや

あはれなるそやゆきかたむさな花のうらふいしのや



六月梅もあつし庭のうしろに咲くはまのたのむらさき

玉蕊草

子花

新ひかりの草に花はひらきを梅の香にいらぬの草

菖草

松

佐々木屋のあつし花は梅の香にいらぬの草

水玉草

草

那波のあつし花は梅の香にいらぬの草

吹草

あや光

おれらや玉の粒あつし梅の香にいらぬの草

光草

花

夏の山はあつし花は梅の香にいらぬの草

火傍草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

牡丹

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花

折金山のあつし花は梅の香にいらぬの草

具草

南草

みらる花のあつし花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

花は梅の香にいらぬの草

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

秋部

初見草 萩

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ  
あつたにふのいふにうらやましくはなれぬ

秋の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

庭忘草 芭蕉

秋の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

夕顔草 あつた

名ふす草の花は咲くはひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

鏡草 あつた

あつた草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

田草 あつた

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

忘草 あ

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

形見草 菊

又は菊の中にも一真列はありての書はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

百重草 菊

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

ふし草 花

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

白草 七月十四日

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

河玉粒 竹の露

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

夕玉粒 あつた

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

次郎草 花

花の草花はひさびさ見たことあるよかゝる草花を西へてきた

冬部

初見草 菊

時菊の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

兼代流 初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

秋草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

水鏡 初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

初見草の序のつりしとらうこまのたはるくうりまやたはる

夕見草 心

自然山月夜の月影をいかにかきとる半はるいも夜を

移りにたりふとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

昔もらん草 心

昔も月をくしらむとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

折らん草 全

夕見草は月やとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

折らん草 全

夕見草は月やとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

折らん草 全

夕見草は月やとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

折らん草 全

夕見草は月やとよせりて夕見草は月やと夜のを成し

目見草 全

山よりの曉よの夕見草やあつと草は行とあし

霞見草 心

あつと夕見草やあつと夕見草は月やと夜のを成し

赤草 古一書

あつと夕見草やあつと夕見草は月やと夜のを成し

目見草 心

あつと夕見草やあつと夕見草は月やと夜のを成し

十二月失名

昔新月 正月

く終り月代からしと夕見草は月やと夜のを成し

年初月 同

むかしとやふらにさし一月必とありさくぬきさる

雪消月 梅津月 二月

年少してまよとんじにありの終の世に消月の比もまよとん  
大元の程やまよとん梅津月いつにさくとも飛ぶるふは

花津月 夏見月 三月

花津月なるよりさるりの後の名のありむるさく我に神のさく

卯花月 夏初月 四月

夏序のかつる趣路のさるるさく卯花月の何とさく  
郭公のさくさく夏は月さるるのさくかさるのさるる

狭衣月 大月をさるる月さくさくさくさく

かきぬにさくさくさくさくさくさくさくさくさく

涼衣月 秋風月 六月

風吹に池波よさくさくさくさくさくさくさくさく

雲をさるるさくさく山をさるるさくさくさくさくさく

七夜月 秋初月 七月

いこりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

不潔月 草津月 八月

不潔なるさくさくさくさくさくさくさくさくさく

菊開月 結露月 九月

こころさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

神去月 神無月 十月

出雲なる神の祭さくさくさくさくさくさくさくさく

雪の月 神海月 十一月

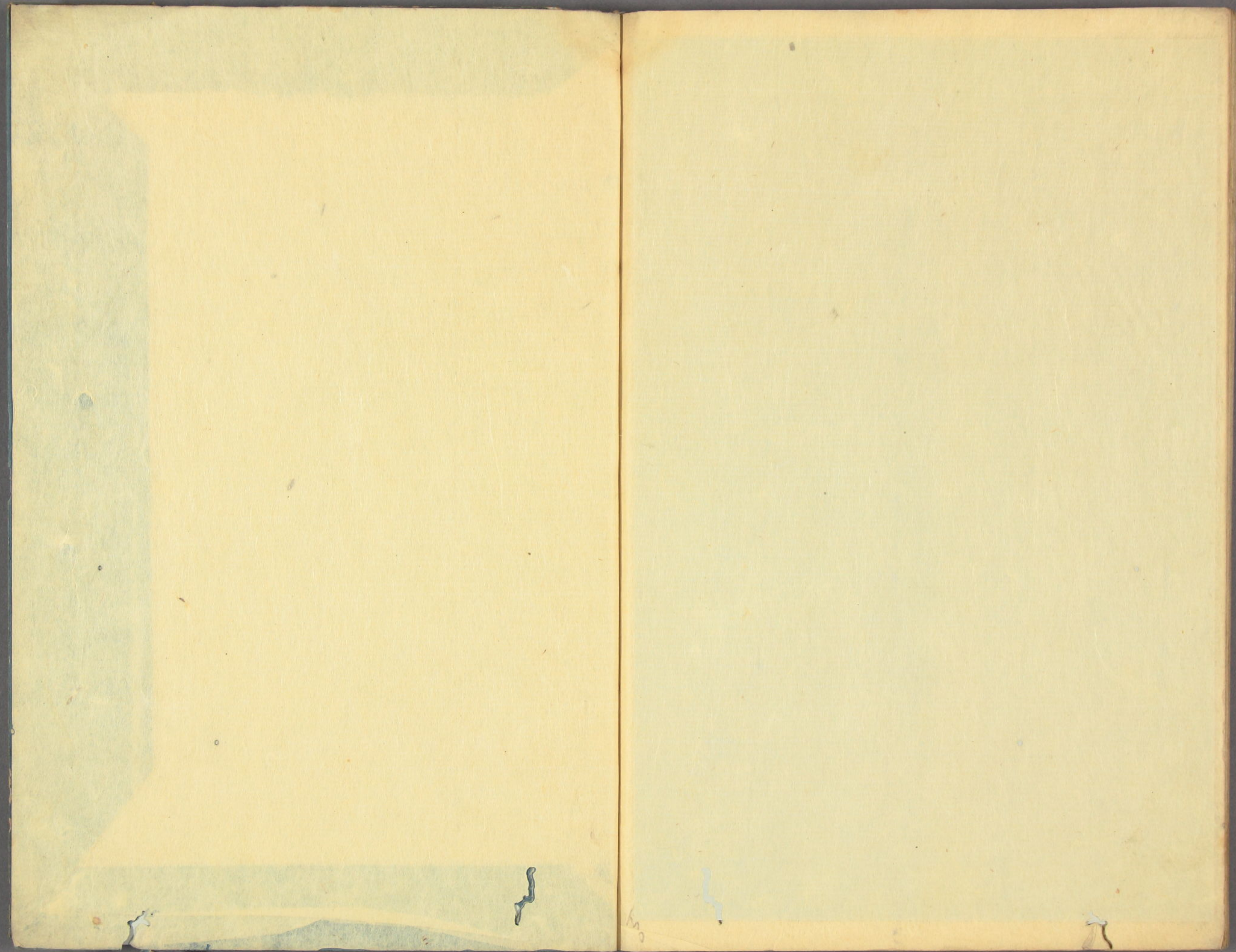
山風と雪の月といふ事一とてなまなまをてあなまのうら

言古月 親の月 十二月

小菟をやとや啼くし那彼くくねる月のひさたりつ  
我人のこころはまらる親の月をいひのらるなりぬし

慶安元年六月書之

百葉集草木并十二月吳名草傳抄 終





歌二